

高等小學書方手本第二學年上甲種

K140.72  
2.11  
2上

K140.72

2.11

2上

書 書

第 一 號



高等小學書方手本

第二學年用上甲種

文 部 省

しろたへの衣の塵は掃へども  
憂きは心の曇りなりけり  
とりぐにつくるがざしの花もあれど  
にはふ心のうるはしきかな

源1甲上

奥深き道も極めん物事の  
本来をだにたがへざりせば  
國民をすくはん道も近きより  
かし及さん遠きさかひに

源1甲上

寒地から熱地へ熱地から寒地へわたる  
禽鳥で我が帝國の領土を過ぎて翼を  
休めるものは少くない。鶴の群は西比利亞

方面から飛んで来て朗な聲を朝鮮の  
空に響かし鷺は熱帯地方から  
飛んで来て一望十里の青田に下り立つ。

彫刻繪畫類聚參

五

高甲上

考陳列裝飾展覽

高甲上

六

近衛鷹司九條良

七

高三十一

利後田重正徳川

八

高三十一

人怒ル時ハ感情益々激スルヲ以テ言行自ラ  
常軌ヲ逸シ冷靜ノ我ニ復リテ後悔スル  
コト多シ。西諺ニモ怒ノ最後ノ瞬間ハ後悔ノ

九

高甲上

最初ノ瞬間ナリトイヘリ。怒ルトモ直チニ之ヲ  
言動ニ發スルコトナク先ヅ心ヲ冷靜ニシテ  
然ル後徐ニ之ニ對スル處置ヲ考フベキナリ。

十

高甲上

豈余を妨ぐる  
アルプ山あらんや。

十一

高田上

不能といふ語は唯  
愚人の辭書に在り。

十二

高田上



鏡は一物をたくはへず私の  
心なくして善の心を照すに

是れ善悪の海あら  
はれずといふことなし。

官國幣社。熱田。賀茂男。  
山。平野。稻荷。廣瀨。龍田。

十五

高甲上

鹿島。香取。湊川。藤島。四。  
條。畷。鹽。竈。金刀。比羅。

十六

高甲上

何才に鳴きて行くらん  
ほとよきまのす  
霞のわたりの  
まだ夜涼きに。

時を平安城を  
すぢかひに。  
時を鳴くや空雀と  
十字文。

千古の雪を戴ける富士の高嶺も  
一抹の白雪其の山腰を掠むる時  
益々雄大の觀あり。霞の奥にも

尚花あるを思はしむる時吉野  
山一目千本の光景は殊にゆかし  
きを覺ゆるにあらざるや。



兄弟泣くく立出づるを母は  
聲を上げておれ止め給へんよ  
今こそ時致が甚當許すぞと

泣くく立出づれば兄弟も  
うれし泣きに伏轉び見る  
人をもたもとをしほる。

矯風彰善。慰撫救濟。

去華就實。拳々服膺。

斯心奮發誓言神明。

三十七

古人有云斃後已。

三十八

高甲上



拜啓生後の際はは多用中おびくは見送り  
下され厚くは禮申上昨夕八時半無事  
京城着今朝拓殖會社に出頭石橋理事に  
面會致し處種々懇切に由話下され庶

務課に勤務すべき旨申渡されは當分事務  
見習の上實地練習に從事致すことと相成る  
べくとの事には座小取敢へずは禮旁若也報  
申上度委細は後便に譲り申す敬具

咸鏡平安黃海京畿

江原忠清全羅慶尚

損失價格契約書

三十一

高甲上

責任保險金

三十四

佛法得道說教感

化譬喻智慧慈悲。

思慮周密にして果斷に  
富み計畫一たび定まれば  
直ちに之に着手し勇往邁進  
成功を見ざれば止まらず。

活動を以て無上の娛樂とし  
安逸を以て最大の苦痛とす。  
獨り自ら活動するのみならず  
又能く人を活動せしむ。

V140.12-2.11  
2冊

明治四十四年十二月五日 印刷  
明治四十四年十二月十二日 翻刻發行



著作權所有

明治四十四年十二月七日  
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新橋地

高等小學書方手本  
第二學年用上甲種

定價金三錢

文部省  
日高部秩父

發行者

東京市小石川區指夕谷町百三十六番地  
東京書籍株式會社

印刷者

東京市日本橋區通一丁目十九番地  
大倉保五郎

發行所

東京市日本橋區新橋地  
株式會社  
國定教科書共同販賣所

